琉球大学学術リポジトリ

小学校外国語学習における英語絵本読み聞かせの影響の検討

メタデータ	言語:
	出版者: 琉球大学大学院教育学研究科
	公開日: 2021-04-16
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 浦内, 桜
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/48210

小学校外国語学習における英語絵本読み聞かせの影響の検討

浦内　桜

琉球大学大学院教育学研究科高度教職実践専攻

1.　はじめに

2017 年 3 月に新しい学習指導要領が告示され，2020 年度から小学校中学年に外国語活動，高学年には教科としての外国語が導入された。学習指導要領により，目標も内容も明確に示された。今まで，教科前の外国語活動で行われていなかったものとして，「読むこと」「書くこと」が新たに導入された。

第 2 言語習得に必要な最低条件として,「インプット」と「アウトプット」の必要性が重要視さている（Krashen, 1982；村野井，2006；白井，2008）。その中で，十分なインプットなしにアウトプットばかりに重点を置いても言語習得は進まないことが指摘されている。なぜなら，ある程度の基礎もないうちから，どんどん英語でコミュニケーションすることにより「変な」外国語が身に付いてしまう，という問題点があるからである。このことから，第 2 言語習得において重要なことはアウトプットありきの指導ではなく，インプットが先行しなければいけないことが指摘されている。（松浦・伊藤，2012）

このインプット理論に基づき，村野井は，効果的なインプットの取り入れ方を 4 つ紹介している。1 つ目は,「理解可能性」である。これは，何のヒントもなく全く理解できないようなインプットではなく，ある程度のヒントや手がかりによって理解できるようなインプットが第 2 言語習得を促進するということである。2 つ目は,「関連性」である。インプットの内容が自分の生活，将来，興味・関心に関連があるかということである。3 つ目は,「真正性」である。これはインプットが現実の言語使用を目的として書かれたり，話されたりしたものかどうかということである。4 つ目は,「音声と文字のインプット」である。第 2 言語のインプットは文字だけでなく，音声でも取り入れることが不可欠であるとしている。上記の 4 つの条件を考慮しながら，どのようなインプット・ソースがあるのかについて，村野井は CNN j や BBC Word 放送，NHK 国際放送などを挙げている。しかし，これらは，中学校・高校・大学を対象にしたインプット・ソースの提案である。

小学生を対象に行われた研究では，インプット理論に基づき英語の絵本読み聞かせを推進している研究が存在する（大川，2014；松浦・伊藤，2012；松本，2015；内山・染谷，2019）。結果として，児童の英語に対する興味・関心への高まりやアルファベット学習への貢献など肯定的な結果を示している。しかし，これらは，教科化以前の実践事例であるためか英語（外国語）専修の学生あるいは英語（外国語）専科の教師が実践を行い，効果を検討している。今後は，小学校での外国語の教科化に基づき，英語（外国語）を専修していなくても児童に指導をしていかなければならない。

英語（外国語）専科ではない場合，英語絵本の読み聞かせは同様に児童にとってポジティブに影響するのだろうか。英語（外国語）専科ではない場合，児童にどのような変容が見られるかを検討することは，今後の教育現場において，新しい知見を与えることとなり，有用であると考える。また，小学校における外国語の授業実践に関する基礎的知見を蓄積することとなり今後の小学校外国語活動及び外国語科に貢献できるだろう。

2.　研究の目的

以上を踏まえ，本研究では，以下の 2 点を目的とする。1．英語（外国語）専科ではない筆者が，英語絵本の読み聞かせを行うことによる，児童の外国語に対する興味・関心の変容の検討 2．実践を通して効果的な英語絵本活用方法が見出せた場合その提案を提出することを目的とする。

3.　先行研究より

(1)　絵本と読み聞かせの意義

先行研究によると，文と絵が一体となって響き合い物語を表現し，ページをめくってストーリーを楽しむ絵本は，子どもたちの想像力を育み，能動性を引き出してくれるメディアであり，人生における喜びや感動を読み手に伝えることができるコミュニケーション手段となり得る。さらに読み手と聞き手が心を通わせながら物語体験を共有する絵本の読み聞かせは，子ども達の情緒的発達を促し，よい絵本の中での優れた文章との出会いによって，豊かな言葉の体験をし，言語に対する感覚や思考力や表現力を培っていくことができるのである（香宗我部・鈴木，2012；松居，2003）。さらに，コミュニケーションやインタラクションの機会が得られるという絵本の読み聞かせは，子どもたちの自己形成や周囲との関係作りやコミュニケーション能力の育成に重要な役割を果たすのではないかと考えられている。

英語絵本の読み聞かせに関して，相手の話を聞き取る力や未知語・表現の意味を 類推・推測する力，大意をつかむ力を育成する（樋口・大城・國方・高橋，2010）ことが主張されている。子どもたちが楽しみながら絵本の中で異文化体験をし，意味のあるストーリーの中で英語の音声にふれることができることからも，英語絵本は有効な教材であるといえる。英語活動の中で子どもたちとの関係構築を図りながら英語絵本を活用することによって，子どもたちにコミュニケーションの楽しさを体験させ，コミュニケーションへの積極性を育てることができるのではないかと考えられている。

(2)第 2 言語習得を左右する心理的要因

どのような心理的要因が第 2 言語学習者の言語運用に関わるのかを把握する上で，村野井（2006）は MacINtyre, Clement, Dornyeyei and Noels(1998)が提唱した「第 2 言語でコミュニケーションしようとする意欲」の概念とその構成要素から，さまざまな要因に影響されながら，コミュニケーションしようとする意欲を高めたり低めたりしていることが分かると主張した。このモデルは，学習者の英語力，性格，自信などを考慮しながら，育てる必要があることを教えてくれる。外国語活動及び外国語科の目標にある「主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度を養う」（小学校学習指導要領 2017 年告示）を図る際に，忘れてはならないことであろう。

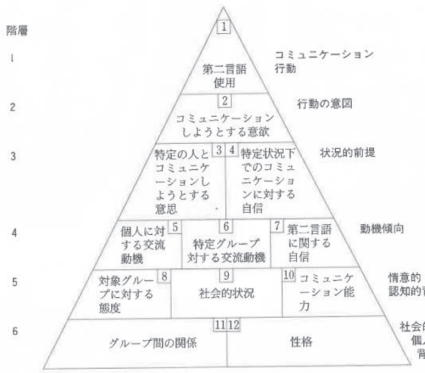

図 6-1　コミュニケーションしようとする意欲を左右する要因（MacIntyre et al., 1998）

4.　実習校での実践より

A 小学校の協力のもと，小学校 5 年生 101 人（男子 52 人，女子 48 人，不明 1 人）を対象に，外国語授業の中で，“Today is Monday”，“Me myself”，“ The very hungry caterpillar”の 3 冊の読み聞かせを行い，後日，質問紙調査を行った。調査にあたり，質問紙に無記名であり回答は任意であること，回答の拒否や中断は可能であること，得られた回答内容は研究以外の目的には使用しないことの 3 点を教示した。絵本について，(a) 授業と関連のあるもの，(b)英語圏で親しまれているもの，(c)和訳の絵本が存在しているものをそれぞれ選定した。質問紙の内容に関して，本研究の目的である 1．英語（外国語）専科ではない筆者が，英語絵本の読み聞かせを児童に行うことによる興味・関心の変容の検討を行う前に，筆者が絵本の選定に難色を示したため，どのような絵本が面白いと感じるのかを知る目的で，面白かった絵本を選んでもらい，その理由について具体的な回答を求めた。理由について一部 Table1 に示す。

さらに，今年教科として導入された外国語の授業についてどのように思っているのかを知る目的で，外国語授業が好きかどうかを 5 段階（1;嫌いー5;好き）で回答を求めた。またその理由について具体的な回答を

Table 1 ：選んだ絵本が面白いと思った理由

Today is Monday	The very hungry caterpillar	Me myself
・分からないけど面白いから（男） ・ZOOP のジョークが面白かったです（男） ・5 年生で初めての本の読み聞かせだったから（女） ・（理由なし男） ・面白かったというよりも，とちゅうで，解説（日本語で）してくれたのが，分かりやすく，いいなと思いました。（男）	・さなぎになる前のところがおもしろかった（男） ・よくあんなたくさんのたべものを食べるなと思いました（男） ・あんな小さかったのにいっきにおおきくなったから（女） ・たくさん食べていたから。その後に大きなあおむしにあるのも面白かった（女） ・はらぺこ青虫のいっぱい食べるところが面白かったから（男） ・人間の食べ物ををたべてお腹をこわして，虫の食べ物を食べたらなおったから（男） ・さりでのところが面白かった(男) ・色々なものを食べていって最後に大きくなってきれいなちょうちょになるところが面白かった（男） ・さなぎになる前にとてもふとっていたからです（女） ・あおむしがいっぱい食べても，おなかをすかせてるのでとっても面白かったです（女） ・月～日までいろんな食べ物を食べていた。月～金のフルーツの本のしかけが面白かった。英語でもわかりやすかった（女） ・いっぱいたべものをたべてもおなかいっぱいににたべるから（男） ・最後のページでめちゃめちゃ大きいちょうがでてきたので	Me myself ・自分みたいと，共感できたから（男） ・あいるはうらおもあてがはげしい（男） ・いろんな自身があったから（男） ・なんとなく（男） ・自分の性格が変わるところ（女） ・たまにはとか，自分と一緒なのでいいと感じました（女） ・自分のほんしょうがわかれるし，いろいろなことがわかるから（女） ・朝起きて，かみがぼさぼさの時が一番面白かったです（女） ・いろいろな本の人の感じや表現があるから（女） ・時々やらなかったところ‘（女） ・はらぺこあおむしとかはみたことあるし，私自身という本は「あ，私もこんなとこあるな～」と思ったから（女） ・色々な性格がでてきて面白かったからです。（女） ・私自身がどんななのかを振り返ることが出来たからです（女） ・なんで，ときどきなのかなぁ～っておもったから（女） ・主人公が面白いから（女） ・その子はどんな子かわかるから（女） ・いろんな「私」があって面白かった（女） ・反対なところとか気持ちが違うところが私達にどことな

求めた。本研究の目的である 2．実践を通して積極的な英語絵本活用方法の提案に関して，2 週間という実習の中で結論付けることは難しく，今回は提案するに至らなかった。

結果と考察

面白かった絵本について，“Today is Monday”を選んだ児童数は 7 名，“ Me myself”を選んだ児童数は 39 名，“ The very hungry caterpillar“を選んだ児童数は 55 名であった。一番多かった The very hungry caterpillar は「はらぺこあおむし」として，日本語訳版のものが親しまれているため，内容の理解がスムーズだったからではないかと考えられる。面白かった理由に関しても，内容に関する表記が多かった。Me　my self に関しては，「親切にするときもある」「失礼な態度をとるときもある」というようないろいろな自分が存在するという内容である。そのため，自身と照らし合わせながら共感している，というような意見が多かった。

外国語授業が好きかどうかについては中心化傾向がみられた（M=3.3，SD=1.13）。106 項目の回答が得られた。大学院生 1 名，中学校英語教師 1 名，大学院准教授 1 名の計 3 名で収集した項目を KJ 法により分類した。質問項目の検討及び整理の結果，先生が何を言っているか分からない，意味が分からない,言っている意味が分かるというような「理解」，あまり発音がうまくできない，英語を言うのが難しい，発音がみんなより良くできるからというようなというような「発音の要素」，面白くない，つまらないから眠い，集中できないというような「面白さ」，授業内容が簡単すぎるというような「容易性」,ゲームや歌が楽しい，みんなでコミュニケーションをとるのが楽しいというような「楽しい」，英語がわかると将来のためになるし，うきうきする，達成感があるというような「有用性」，発音に自信が無い，発表したいけど自信ないというような「自信」の合計 7 カテゴリーを抽出した。発音の要素のカテゴリーにはネガティヴな内容がある一方でポジティヴな内容も見受けられた。英語に慣れ親しみを持っている児童とそうではない児童では，圧倒的に外国語の音に対してインプットが異なるためだと考えられる。2 極化傾向を防止するためにも，授業の中で英語のインプットをしていかなければならないだろう。絵本の読み聞かせがその役に立つことを期待したい。

5.　実習の課題および今後の研究について

今回の実習では，児童の外国語活動への好みとその理由を把握するにとどまった。今後，今回の結果を分類してどのようなカテゴリーが得られるのか今後検討を進めていく必要があるだろう。また，効果的な英語絵本の活用方法の提案にも至っていないことから，今後の実習ではビデオカメラを設置し，自身の英語絵本読み聞かせの様子，児童の様子を見取ることで効果的な英語絵本の活用方法のヒントを得ていきたい。また，絵本の読み聞かせを行う際には頻度や量，絵本を選定する際には児童の生い立ちなども考慮しなければならないことが考えられる。今回はそのようなことを考慮することなく実践を行った。このことに関して検討を行っている先行研究を探すとともに，今後の実習ではもちろん考慮していく。

今後の質問紙調査は，抽出したカテゴリーを基に調査で得られた記述等を参考に，項目を作成し，各項目の意味の明確性などの観点で項目内容の確認を行い，意味が確実に伝わるよう文言の修正を行う。

第 2 言語習得理論における研究は言語学と心理学が中心となっている（村野井，2006；白井，2008）。今後，これらを含めた先行研究を読み進めていくと同時に，上記に示した今回の実習での課題を踏まえて実習校での実践を行う。具体的には絵本の有効性を検討するために，外国語学習における学習意欲について，児童に事前調査及び事後調査を行い，分類・比較することで児童の外国語に対する興味・関心の変容を検討する予定である。さらにビデオ等を用いて実践を分析し，効果的な英語絵本の活用の提案をしていく。

引用文献

大川陽子，2014，「小学校英語活動における英語絵本の活用に関する研究―児童の発達段階に応じた英語絵本の活用―」『教育大学小学校英語教育センター紀要』５，31–40,

Krashen, S. 1994 The pleasure hypothesis. In J. Alatis (Ed.) Georgetown University Round Table on Languages and Linguistics. Washington, DC: Georgetown University Press, 299-322.

香宗我部秀幸・鈴木穂波, 2012,『絵本を読むこと「絵本学」入門』東京：翰林書房.

樋口忠彦・大城賢・國方太司・高橋一幸 ,2010,『小学校英語教育の展開―よりよい 英語活動への提言』東京：研究社.

松居直, 2003,『絵本のよろこび』東京：日本放送出版協会

松浦友理，伊藤英, 2012,「小学校外国語活動における英語絵本の導入効果に関する実践研究」『岐阜大学教育学部学校教育講座』29，94-101.

松本由美，2015,「初期英語教育における絵本の有効活用 ―児童の自発的反応を引出す「読み聞かせ」の試み―」『玉川大学リベラルアーツ学部研究紀要』8，35－41.

村野井　仁，2006,『第二言語習得研究から見た効果的な英語学習法・指導法』　大修館書店.

白井恭平，2008,『外国語学習の科学』　岩波書店.

内山寿彦・染谷藤重，2019,「小学５年生における英語絵本読み聞かせがアルファベット学習に与える影響―児童の動機づけに焦点を当てて―」『上越教育大学教職大学院研究紀要』7，225-232.